

在外邦人等輸送について

元空自輸送機パイロット 溝口 博伸

在外邦人等輸送に係わった経験から幾つか印象的であった事項と課題について当時の記憶をたどりながら記述します。

内容としては ①1997（平成9）年7月の「在カンボジア邦人等輸送のための政府調査団」、②1998（平成10）年5月の「在インドネシア邦人等輸送のための事前調査チーム」、としての2つの活動です。

1 在カンボジア邦人等輸送のための政府調査団（1997年7月）

（1）邦人等輸送の概要

カンボジア国内に所在する約400名の邦人を安全に退避させるため、隣国タイのウタパオ海軍基地にC-130・3機を展開し状況を見てカンボジアの首都プノンペンのポチェントン空港からウタパオ海軍基地経由で日本に輸送するものであった。

（2）政府調査団の派遣

在外邦人等輸送（隊法100条の8）を発動する要件の一つが派遣先飛行場の安全の確認であった。合わせてカンボジア政府、軍の了解の取り付けとともに、飛行場関係者との調整など空輸支援も政府調査団の任務であった。言い換えれば、ポチェントン空港の安全を確認し、ウタパオの輸送機部隊の発進にゴーを掛けるのが最大の仕事であった。

私は空幕運用課で輸送計画を立案したのち、政府調査団としてカンボジアへの派遣を命ぜられた。メンバーは航空自衛官が私を含め4名、防衛庁内局の部員1名、外務省職員1名の計6名であった。航空自衛官4名は輸送機パイロットが私ともう1名、あとは情報と整備各1名であった。内局部員は若い警察官僚、外務省職員はカンボジア語に堪能で現地勤務経験を有する者であった。このような陣容から政府調査団とされたと記憶している。年齢および階級的に私が団長との位置付けであった。

政府調査団はC-130の小牧発と同じ7月12日に、東京国際空港から民航機でタイのバンコク経由で最後の民航機に乗りカンボジアの首都のポチェントン空港入りを果たした。現地日本商社の手配で、ホテルの確保、マイクロバスの借り上げ等が行われ軍司令部や日本大使館などへの往来が可能となった。

（3）オーストラリア軍からの聞き取り

到着後のカンボジア軍司令部訪問では、司令官の対応は「何故我が国から日本人が避難するのか、その必要はないであろう」との不快感を表したものであった。

一方大きな収穫もあった。それは、地雷処理の任務で同司令部に派遣されていたオーストラリア軍人たちを紹介してくれたことであった。長は陸軍少佐であった。彼らは我々政府調査団と同様、オーストラリア人退避の調整任務を与えられ、すでにポチェントン空港からマレーシアのパナン空港への輸送支援を実施していた。

直ちに彼らと我々調査団のミーティングを設け作戦の概要を聴取した。当初、私は地雷処理のメンバーが輸送機運用に係わる調整が出来るのだろうかとの疑問を持ったが、ミーティングを進めるうちに、彼らは自国民退避輸送のマニュアルを持ちそれらに従って任務を遂行していることが判明した。

(4) オーストラリア人退避輸送マニュアル

戦争などに際して外国に在留する自国民を保護し、必要に応じて退避させることは軍の任務である。諸外国にはこの大原則があり、民航機や民間船舶が安全に運行できない場面では軍の作戦として具体的な手順が纏められていた。マニュアルには次のような手順が示されていた。

ア 輸送機の派遣に合わせた自国民の集合

自国民を安全に空港に集結させ、タイミングよく輸送機に搭乗させる必要がある。そのため、過去の経験に基づいた貴重な手順等が記されていた。

① 輸送機派遣と搭乗割当て

在カンボジアのオーストラリア人に対し輸送機の派遣日時が、「第1便は〇〇日〇〇時、第2便は翌日〇〇時、各便への搭乗希望者は大使館に申し出よ」といった内容で、オーストラリア人会や大使館から、電話、FAX、FM放送で伝え、各人に登場できる便を割り当てる。

② 大使館への集合

各便への搭乗に当たっては、プノンペン市内のオーストラリア大使館への集合が指示され、その際、次のような遵守事項が伝達された。「各便の出発6時間前までに大使館集合、車を利用するものは大使館から500m以遠に乗り捨て徒歩にて集合。荷物は手荷物のみ、家財やペットは禁止。オーストラリア国籍を有する者のみで愛人および二重国籍者の同行禁止。」

③ 大使館集合者のスクリーニング

集合したオーストラリア人には水・食糧が配布され、遵守事項等の再確認を経て大使館がチャーターしたバスで空港へ移動し、輸送機の到着に合わせ搭乗開始。

(5) 米軍からの依頼

空自C-130が展開したウタパオ海軍基地には米軍のC-130も展開していた。空自C-130・3機、輸送機隊長は401飛行隊長の田中淑智2佐であった。私と田中2佐は衛星電話（インマルサット）で連絡を取り合っていた。

田中2佐との情報交換により米軍の作戦の概要が判明した。ウタパオ海軍基地には米空軍C-130とともに海兵隊1個中隊が待機しており、この海兵隊が必要に応じてポチェントン空港に先行し、場合によっては飛行場を制圧した後、C-130を運用するとのことであった。

このようなことから、空自C-130の運航は米軍の運航時期に合わせることを安全であるとの判断に至った。後に田中2佐から厄介な依頼が来た。米軍情報では、飛行場北端から北西1.5kmの地点にスレット（脅威）あり、また、飛行場に向かう道路に常時トラフィックジャム（交通渋滞）あり、この2件の情報を確認されたいとのことであった。米軍は人工衛星で飛行場周辺を監視していたが、この2件がクリアしなければ米軍はC-130運航の決心がつかないとのこと、米軍からの調査依頼であった。

ア 飛行場北西のスレット

地図を頼りに人気のない田園風景の中マイクロを走らせると、目標地点に粗末な小屋が見えてき

た。接近すると対空機銃を装備した戦車が確認できた。しかし放棄された錆びだらけのモノであり、脅威にはなり得ないと回答した。

イ トラフィックジャム

ポチェントン空港に向かう主要道路を目標のトラフィックジャムに向かってマイクロを走らせると、この原因がすぐに判明した。軍が検問所を設置し空港に向かう人や車両のセキュリティーチェックをしていたことから生じた渋滞であった。軍がポチェントン空港を掌握している証であると回答した。

(6) ポチェントン空港の確認

オーストラリア軍の最後のC-130の運航が判明した。政府調査団として邦人輸送の事前にポチェントン空港に出向き、退避の様子をつぶさに確認することとした。当日は早朝にも関わらず空港周辺は群衆で溢れていた。駐車場でマイクロバスを降り群衆の中に入り込みオーストラリア軍のC-130の到着を待った。定刻を少し過ぎた頃、1000フィートほど上空にC-130が現れ大きく旋回したのち降下進入を開始した。着陸した機体が駐機場に入ると直ちにオーストラリア人が乗り込むのが見えた。するとその時、けたたましいサイレンとオートバイの爆音が聞こえてきた。飛行場わきの道路に二人乗りのバイクが侵入し、それを軍のジープが追跡してきたのである。

群衆の前で空に向け小銃を発砲しバイクを制止したかと思うと、次の瞬間、バイクから降りた男をその小銃の床尾で殴り跳ばし捕捉した。群衆は騒然となり一気に不穏な状況になった。C-130の離陸まで見届ける予定であったが危険な状況になったと感じ直ちにマイクロバスに引き返し空港を離れた。

これら大勢の群衆に不穏なものを感じたが警備当局の行動を見て航空機の運航には支障ないと感じた。

2 在インドネシア邦人等輸送のための事前調査チーム（1998年5月）

(1) 邦人等輸送の概要

インドネシアの主要な4都市（ジャカルタ、メダン、スラバヤ、ウジュンパンダン）の空港からの輸送のため、シンガポールのパヤレバ空軍基地にC-130・6機を展開しピストン輸送を行うものであった。シンガポールから本邦へは民航機を予定していた。

(2) 事前調査チームの派遣

カンボジア同様、私は空幕運用課で輸送計画を立案したのち、C-130の展開に先立ち、調査チームの一員としてシンガポールのパヤレバ空軍基地に派遣された。今回の輸送は、前年の在カンボジア邦人等輸送と異なり、邦人数も約1万4千人と圧倒的に多く、かつ対象となる空港が4カ所となり、輸送機の運用も複雑なものとなることが予想された。このため、事前調査チームの任務はジャカルタとメダンに展開した空輸支援隊からの情報収集および連絡調整はじめ、輸送機展開に当たってのパヤレバ空軍基地との調整等多岐にわたるものとなった。

(3) 空輸支援隊との連携

衛星通信等によりインドネシアに展開した空輸支援隊との通信連絡は密なものとなり、インドネシアの情勢、邦人の状況が確認できた。各地域の情勢に応じて輸送機発進先の優先順位などを空幕運用課、輸送機部隊に助言することが出来ると考えた。

(4) パヤレバ空軍基地との調整

パヤレバ空軍基地の使用については確認が取れての現地入りであったが、予想外のことが起こった。一足先に韓国軍の展開が予定されており、空自C-130・6機の駐機場所は飛行場片隅の誘導路とされていた。約200名の要員が待機するエプロン地区からは遥か遠方となり昼間1時間待機の態勢など取りえない状況であった。

他の国も中継空港としてパヤレバ空軍基地が適地であると判断していたことから、シンガポール政府も軍もピリピリしている様子であった。幸い韓国軍輸送機のシンガポール展開がなくなり、エプロン地区が駐機場所として使用できることとなった。

(5) シンガポールからの要請

日本大使館を通じシンガポール政府からの要請が事前調査チームに伝えられた。「インドネシアから輸送した邦人のシンガポール滞在は24時間以内とし、速やかに日本又は第3国に輸送せよ。」との内容であった。狭い国土に日本はじめ他の幾つかの国が自国民輸送の経由地としてシンガポールを活用しようという動きがあったことから当然の措置と思われた。

たとえ1泊の滞在であっても1万4千人もの邦人のためのホテル確保は難しく、大使館員が悲鳴を上げていたことが思い出される。

3 今後取り組むべき事項

- (1) 政府レベル—一刻も早い政府の意思決定
- (2) 省庁間実務レベル—外務省・在外公館と防衛省・自衛隊の日頃からの連携
- (3) 軍レベル—米軍および他の友軍等との連携および交流
- (4) 部隊レベル—輸送機部隊運用に係わる支援要員等の確保・指定



「カンボジア任務」から帰国したC-130部隊を迎えていただいた、
梶山静六官房長官を囲んでの記念撮影」